諸國
方言

物類稱呼

卅
水

三

ホ 2
619
3

米

物類稱呼巻之三

生植

こめよね○遠江にて天龍の川上にて○がさうと称を山家まてハ米をいまだしてがさうとのことろふ椀に
號ふよ大澤或ハ羽黒山なとへ詣るもの二七日斎をとこもりハがさうと称して
米とハ呼ずとなん和國又ハ朝鮮の方言にも穀を菩薩とゑらしへぬ
東雅ニ雑林類事を引て白米を漢菩薩といひ粟を田菩薩といふを記
せうとの文俗間よ糠味噌といふハ糠と滓とを和して制れるを名づけてさて
ぢんと云是ハ佛經を書写とるう早書のはよ菩薩の二字の艸冠のことをとりて
ササと云事ニ示されバさことハがさうの訛にて是も又米をがさうといふ事に
よれるべし 秘藏記ニ云天竺にて米粒を舎利と云佛舎利も又米粒に似たる故
舎利といふと云 云是三國同日の談なり又早書の時のならひにササ菩薩点菩

加2 619 3

藏書印切り取り有
印は巻之一を見よ

提とそ芥こもむメメ多ん多メ曰縁覧或八弥陀を汲とそこびを坊丈の子
ちきの合文

抹 上もの切大仏ちの本朱とされハ米のがさつろ　未得
ひつぢ 俗に自生も○尾張にて○ひうちと云ハ特に佐渡にて○まさとと云
伊勢白子にて○三ぢんごと云越前にて○ひとそと云

蜀黍 たうきび○京にて○もろこと云丹波にて○きこ伊勢にて○たうきびか賀
にて○かきび越後にて○せのうきび奥羽津軽にて○たちぎこ武州にて○
なうきびと云

玉蜀黍 なんぢんきび○茅門にて○なんぢんきび又菓子きびと云伊勢にて○こちが
くあ又常陸或八越前にて○たうきびと云東国にて○たうもろこしを京
にて○なんぢんたうのきびと云奥羽ちう越後辺にて○まめきびとも又くハ
きびともつ奥の南部にて○きこと云 山形にて八茅の黍を八とろこしと云 伽おにて○さつまきび

紅豆 図備にて○たうきびと云
さげ○九州及上総伊豆にて○ふらうと云奥州にて○十八さげと云奥州
にて○十六さげと云 茎に実糸を大角豆の如く生ずるものを○こづち
と呼西国にて八ふさなうと云

緑豆 古事紀 美豆羅 又 和名 鬢 萬葉 髪
卧詰曰童髪束の時八緒角にて○ぶづらふと云○さげと云
あるいハ丸まるの髪に似ることれ云
ぶんどう○東国にて○やへなうとび又○ろうろくたとぶ茅門にて○ぶ
どうと云ふまにて○ろうごと云伊勢にて○かつも
アとと云尾張にて云ぶんどうあづさ又十六寸なと云ハ別称

豌豆 ちんどう○茅門にて○のくまと云東国にて○ちんどうと云伊勢にて○ぶん
どうと云上総にて○ちんづと云

菜豆 だいこん○ほごの大根相州波多野名産也江戸にて○そぐをとそと云 これ粥

京にて。おゝきな大根を云大坂天満にて。おそね大根とゝふ又宮の前の大根と云
河州守口にて是を漬て。小大根と云 ものの大根ハ小大根 又茎間にて。なゝぬき
大こんとゝふを江戸にて。をろぬき大こんと云

菘

る○京にて。こづゝみ又。たゝけなとゝふを江戸にて。うさゝみ又ひやうずみと云
鄙にて。京菜といふ江戸にても。水菜とゝふ 京都の水菜ハ葉ハ狭く長く廣し京の名菜に及ハず
葛西菜又小松川本所牛島辺の名菜におゐてハ京大坂 又茎ぬきといふ。同引菜と云
ゝ田舎にて菜とも一年の内数度なりまきに名産し
を江戸にて。つまくさとゝふ和泉にて。をろぬき菜と云 江戸田舎にて菜とも大根にても
もかろうゝこと云とも名付る
吋ハつまくさ菜と云 ○京にて。蕪菁と云を東国にて。かぶなといひ根をハうぶと云

韭

もこ大根とゝふ

冬葱

みら○上総にて。ねぎと云是ハ葱をひとりぢと呼なにおゐてハ云
孫ぎ○京にて。孫ぶとと云近江にて。ひとりぢハ西国にて孫ぶとと云 ひとりぢハ西国にて孫ぶと云
京東にて。孫ぎとゝふ 孫ぶとハ根ぶくに入こゝろ胡葱ハ淡き葱の
意根源に對しるの名なるべしつハ助字なり和名きとゝふ故に一文字と云

野蒜

孫葱ハ一ちと云武州葱ハ州と云武州にて又ひとりぢを孫ぢと云
川辺にハ根ハ白糸のごとくなるひとりぢなれと数の名さよ
のびる○加賀にて。孫ぶとと云
びる○京にて。ひるとゝふ京にて。よろくたりと云筑紫にて。ゆん
にくとゝふ

蒜

芋

いも○後河及西国越後高田にて在又常陸にて。ゐぐと云○唐芋と
遠江にて。女芋と云○蓮芋 武州川にて。ハッがしらと云又栗芋とゝふ
和名抄○芋蹲 京にて。いもぐきと云 これハ法師乃
西国尾張にて。だうと云東北にて。からどゝと云 土佐日記 いもゝわ
らめも歯ぐきもなくやうの国と云いもをあてしハ助字なり
つくねいも○京国にて。つく祢いもと云又つくいも又山のいも又やまとなゝ称も
京にても。山のいもとのひ又一名うぢいもとゝふ奥州仙台にて。ちゝいもとゝふ

佛掌薯

と云津国にて八○唐いもと云ふ佐渡にて○手いもと云上州にて○みちいもとゝ
今按に○いもと字和名抄に越とも山のいも八薯蕷とて東国にもいも
といふ品あり又茅拘の山藥八自然薯蕷と云也

南郭遺契 三 員暄雜録 引 山藥本名薯蕷唐代宗諱豫改名薯藥宋英宗諱曙
遂名山藥云云又たくねいもを山のいもとゝふ八ち形山のでゝ又伊のでゝ或石
或人のもにも似り故にかく名つくるなるべし

黄獨 ○いも○考閑て○ゐいもとゝ東国て○かちゐうと云 藥種の仰鳥にあり 日名みて美ゝり
後漢て○ゞゐぷとゝふ和漢て○ぜんぶとゝ仏国にて○ゐんぶ八芋とゝふ

零餘子 ぬりご○相州て○ゝうめとゝ常陸て○いもゞゝとゝふ紀前唐津て○
ぬんごとゝふ 常陸のまにてゝふいゝゝゝゝ八助字へ平忠盛の
いもゞゝふほどにてもなりに名とあり也とゝや故事こに略す

甘藷 ○考閑て○ゝうきゝいも○考閑て○さゝいもとゝ東国て○さつまいもとゝふ紀
ゝにて○からいもとゝふ 享保年中薩州より来る味ひ美みて古性よ
ゝ又長崎に引ゝうきゝいもてゝうせんいもと称する物ゝ是八別種にて
蕃薯なり

薺 なづな○おとこなつな○おとこゝつな等の名ゝ○花さゝ沢○だちぐさと云ゝにたて○ぺんぐさ
尾張にて○ちぐのさんちやくとゝ奥之津州て○すゞのだちこ
とゝふ也茎の実ゝ形きんちゝ名ゝのやく又ゝ線のごちに似り津州て八仲着
の事をだちことゝふ故に名とゝ東国の俗月八月丸にはるとゝて行灯に
約して夜の間の油灯に入る呪ひとゝ

蘩蔞 ちこぐらちこぐ○加賀及東尾張て○ひのさちぐげとゝふ 西尾張て八丹波ゝ
て八○ひんぎうとゝ

鼠麹草 たゝこぐさ○土佐国て○ちゝぐさと称字紀州にて○孫ぐゝもちと云信濃
て○かいちぐことゝふ尾張て○ゝうじぐさとゝ 落

二月二日さまを見て餅を制し好ふ緑となづくこれを蕷にうへてよ
めぶ後とこそ云ふ緑とこそ事実ハ文應実録ようとこそ又五稍蕷とあづく
人日七種の菜一つなり

火焔菜　さんごだいこん○擣菜て○あらげさこそ云ふて○たうらさとつふ

蠶豆　ろらまめ○赤豆て○そらまめといふ西国て○たうまめ蕚て○あつまめ
尾張て○のらまめ　同名多種也ハ伊勢紀州て○月まめ赤豆て○
ふゆまめ下総て○ゆさとうまめ伊勢吸豆て○がんまめ中国て○えん
じゅまめとこそ　京にハ赤豆の中に白て
生れ有になつくとかや

刀豆　ふじまめ○九州及び中国て○たちまめとこそ云ふ

眉児豆　わんげんまめ○京て○わんげんまめとつふ江戸て○ふじまめとこそ云ふ
なんきんまめとこそ云ふて○さいまめとこそ云伊勢白子て○せんごくまめとつふ

農政全書　三眉児豆これ扁豆の類とこそ

黎豆　わんげんさげ○近江て○ちうきうまめとこそ云ふ西国
まて○てうせんさげとこそ云ふ筑前白子にて○なりさまめとつふ　同名多種也　伊勢紀河
にて○みどりとこそ奥之南部にて○さんげとこそ　山形にてはつたいさげ　下総佐倉にて
○せんげいさげ　とつふ東こそ云ふて○二月中六とつふ

莧　ひゆ○赤国にて○ひゆとこそ奥羽洋種て○ひゆ　わさとつふかがてて○ん
びゆうとこそ○馬歯莧　おなじて○いぬひゆうとこそ○かがてて○ぼんびゆう
とこそ江戸にて○ぼうひゆうとこそ

萱艸　ちうんさう○信濃て○ちうとこそ他所て○ちうんとこそ

藁蒿　よもぎ　よもぎ○京江戸にて○よもぎとつふ武蔵の女言に○おとぎと
つふ近江て○ちげとつふ　今按におとぎとつふハ茨とつふ説ハ非　源順和名抄三

蓼　和名　奈都那又蓼蒿　和名　於八木　此出せり　蓼蒿の二字なづかるもぎ
と訓故になづかるとこそ文字になづかるまつ二字つきて正べきう　萬葉二字

波疑（ハギ）又兎牙子と源氏物語の字消しておとなりるとの孔子伝角
女詞に御のこを冠しらておくぎとつふこハはくさべ〜

獨活

うど○西国にて○たらとつふ西国にて八出羽にてを○獨活（くろ）とひ二三寸地上に
ぎらを○うどといつふ所にてなるなる物を○たらと年　阿部氏云松前千
砂野の濱より真の獨活を出とおんこれを○さいきとそ京嵐ひるもの○た
たらうどゝいぬうどとつふ

遠蔬

ぜんまの○上総にて○ぜんごとつふ移に前胡とつふる上総にてハぜんまの

番椒

なるがら〜○あるにて○かうらいごせうとそ　大閤秀吉公朝鮮を伐ちたふ
時移植をなる故にはるに西国及東の他墓にて○こせうとつふ東国にて真
のこせうとつふ　出羽にて○とこぼしとつふ但奥羽のうちにもなんどんと称する所
もあり上総及奥州にて○なんとんとつふ越前にて○まつものこなとつふ八
いずれにて番椒の語源はかけやと
いつもおろ〜ふなり

茼蒿

たうんぎく○近江尾根にて○ろうまとつふ京大坂にて○かうらいぎく又きく
なともつふ宮にて○たうんぎくとつふ

土筆

つくし○東国にて○つくしとそもつふ江戸にて○ほうし　他所にて○たうし　とつふ
「佐保姫の筆ときこえつくし雪かきわくる春のうきぐさ」　為家卿

冬瓜

かもうりとつふ○武州及中国少陸道或ハ上総にて○かやうりとつふ東国
にて○とうぐわとつふ　東国にて○とうぐわをとうがんとそ称てとび又たこんをバ
たこんとつふをとうけもそれもつまて桜井伊丹にて八古瀬を○こうたり又
旦那を○だんな大坂にて朝夷奈（あさいな）と○あさいなん京にて坊（ぼう）を○ぼん京にて
半房（ぼう）を○ごんぼう又ごんぼを○みぶ播磨にて聾（おう）の絶（か）を○聾の国り又みん
らいを○ひろう伊勢にて米一升を○いつとう○二升ゥ升ごいつとう○ただひ法ふかそ
ふたいとあり〜び

南瓜

ぼうふら○西国にて○ぼうふら備前にて○さうまとつふ伊勢にて○なんきん

赤土絞そ○ぎうぐんたぬそ○なんきんうりとゆびうぐらぬそ○ぼうふらのひ○へうはかぐらやとゝ

越瓜

ちろうり○京そ○あさうりとゝ二種紙ぬにて○つぼうりとゝ江戸そ○ちゝあまるとゝ

菜瓜

あうり○京にて○あをうりと和そ○ちんぐ江戸そ○まるづけ和そ○かさうりとゝ 京国にあをうりを瓜と称する

絲瓜

へちま○信濃にて○ごうりゝ云薩州にて○略ちまへ一或人の曰へちまとゝ京はとうりゝ宇ゆとゝ所のとゝ

のゝはいろはのへのゝまちのゝまのゝちのゝ

なるゝ所又筑にへちまのゝはのだんぐろとゝ夏ゝ是はへちまにはあらず色ちゝんぐるの草一名袋とゝ東らくん茶人そ茶筅を草袋に入るにつけて名付せとゝり侍の陪遁ちゝるにて茶道ゝ使ゝり利休

甜瓜

まくうり是とゝ所或曰和蘭ちの産を移ゝ産ゝ是ゝとゝ道化ゝのとゝ多及ひとゝ所ちゝびしひられそ文化はあるゝ○むりひに出和て引ゝ数年ゝにちゝあゝ江戸ゝあゝうゝ安ひゝげに時水を入て紙のゝふゝそ江戸とゝあゝ所ゝ江戸ゝ清ゝ江戸にかゝふけ清水をうゝ人弗の彩白とゝけ茶とゝふゝまひ丸へ一ゝうゝとなんゝたをゝき拙ゝうゝ

まくうり○和まそ○あゝうゝ奥の紀者そ○でうを佐渡そ○ちんのゝとゝ云○又江戸にて云○ぎんまくうゝを備前にて○せんゝうと云奥の津軽又松前にく○ちまうまを和そ八○きんくうとゝ 真桑瓜ハ美濃国志賀村の産を上品とゝ故に名づゝとで又紙おにて○称づゝ云瓜とゝふ味の真実なり此方に用ゝ所の瓜華ゝ見ゝ味ゝ美ひ甚芳ゝ饌ゝの産ハ味ゝ方に勝ひて功なゝ

西瓜

すいくわ○大坂そ○さいうりとゝ

錦荔枝

つるれい〜○ちりまて○にがごうりとよぶ元八苦瓜の形似なるべし

磐梨

いぐみ〜○京及近江にて○いぬなし〜とよぶ小国にて○ちりまいちごとよぶ○ちりまの平地木にて高り五六寸三月実を結ぶ大豆のめくにて赤〜外の色ちくに同

桔蔞

はぶの毛色呼び酸く甘〜京にて小児好んで食ふ藻名未詳

かうもと瓜○伊勢及紀伊熊野にて○うり移と云越前にて○くろうり

とふ土佐にて○ぐどりじと云そ根を同じくてこびと云 紀州にて○じうりとよぶ 和歌二三種ちりまづきのみ

くなりうりの王瓜なり

桔梗

きくやう〜○信濃上田にて○くりんさうと云 **古今和奇集** 物名の奇し

〜秋らうり野八なりたるうり白茅のもとうるるもの色うり行

ぶりうり○茅国及蝦夷及信濃にて○山ぬんぢんとよぶ是和名

按に今世菜とする物濃防風なり江戸の市にあるもの相見縁舎うり

をくるを世を莖菜ともくして胡蘿蔔に似る和真の防風なり

澤瀉

おもだか○北国にて○あくとよぶ茅国にて○さじおもだかと稲と見茅に同

一種慈姑に似て花さく地にもおもだかとよぶ同名異物なり

麦門冬

ぜうがひげ○茅和及江戸にて○ぜうがひげと云東国にて○アとうのひげと云

実及にて○たつのひげと云尾張にて○蛇のひげとよぶ

石蒜

きびとぐれ○伊勢にて○せんとび中国及武州にて○たびとぐれ又ひぐんぐる又

きつねのかみそり○上総或は奥州にて○いつ見いぐる又ひぐんぐる越後信濃に

て○やくびうぐる京にて○かみそりぐみ大和にて○ちこだけ出雲にて○ちつま

ぐみ尾張にて○ちつまぐり駿河にて○かいんで和泉にて○ちてぐる○肥前唐津

にて○ぐくぐる土佐にて○ちれい又ちびと云又ちぐかけと云 又○まんぢゅこけ

と云ふ種類なり

酸模

すいば○茅国にて○ちいどうと云江戸にて○ちかんびと云和泉にて○ちいぐと

いふ上野にて○ちいこうとよぶ茅和にて○ちいこと云 **多識** 酸模すい又ちい

こうあまとあり是へ

酢漿草

かたばみ 一名ていまの花 ○京にて○えんばう泉州堺にて○すも紫州にて○こがもこれ出雲にて○ちいぐさ和州にて○すずさ○ぬ、

○こがもこれ出雲にて○ちいぐさ和州にて○すずさ○ぬ、

白朝

ちうこ花 ○江戸にて○ちうこ花と云これ古名なり後海にて○ちうこぐさと云

加賀にて○かもめぐさと云伊勢にて○ひよのくそと云 按に本草に載に似て

小白花紫色唐種にろくろんさうと云ものと云

大蓼

せんにんさう ○九州東にて○ふうろぐさと云尾張にて○ろうぐさと云武州

隅田川辺にて○馬の歯ぐきと云

立葵

たちあふひ ○武州にて○たちあふひと云勢州にて○やうらうぐさと云後

にて○あれぐさと云 藻名未詳

萆茹

ろうのさぐさ ○江戸にて○ろうぐさと云紀後にて○ちうどころと云 寅

大和本艸

芋商陸 ゆにて小也根野老に似りあやまりてこれを食べ狂死

て此説にちうどころと云

敷子花

ひるがほ ○陸奥及上野にて越後にて○あめちうどころと云越あにて○

こうづるとうふ根及海辺にて○へびあさがほと云

縫摺艸

もじずりぐさ 一名 ○筑前にて○ちんこだれと云 今按に呆ふの乳

に云移と云物を摺て用ゆ一説に物ずりの形かめちんこに

似り故に称ずと云尾張にて綿繰のゑ床のあの場の

ろくろを云こと云もおなじ又懸の類を呆ふと云事ハ

説郛

ひえぐさ 點心ともて云

勢陽雜記

勢州 吞海院八景の地にて

後の面も見あるに所にて一体和尚数句に

海とのむ京のあの雲の富士の絵

ちごぐさ 一名ちやぐさ ○高野にて○うあいこ又ぜがいさう 善鬼の謡に大唐の天狗の首領善鬼坊

ゝゝゝ 牛蒡に似たり ゝゝゝ 大坂にて。ひめごれ江戸にて。おきれぐさ 元和名類聚抄 ちうぐ
ごぐれ 京にて。がくさい 加賀にて。ふしくまるつ 甲州にて。けいせい
さい 丹波にて。かづら越中にて。松ごろ又。てんぐのりごと 伊豆にて
。ちんこ 丹波にて。ちこ又。かつちご 飛騨にて。松ごろ。ぜがいさい 飛騨
にて。もめくひ又。かつけ さぶまにて。尉どのこと

兎絲

松かーづら○東国にて。さうめんぐさ こと 飛騨にて。うーのさい
めんこと云 楽に下野の日光山さうめん谷の水中にはえるをこれ東
武より陽田川にうつす

三稜

うつど○伊勢にて。さびの三稜草 東武にて八井沢の池ノ上に
多くあり 三稜草 稜稜れ

玉樓春

いとくちなー○武蔵にて。たまそだこと云

石逍遥

まんねんうら○小田にて。せんだんづらとつふ

連錢草

ミヤ

ミつへせんさい ○江戸にて。かんこ草 こと云 駿河にて。かさいうま こと云 加賀
にて。ゆやうこと云 さるぢを貫て生じ氣味芹の臭ありて鉄猫児の形よ似て
花ありて紫色によりて名づけて かさいうまつふ 又蓮の香を故に名づ蓮
の名ありべし 是 廣大和本草 の説かつて松岡氏曰唐土の書に半邊蓮
と云 ものこれ日本にて繪よ書 唐草 こと 扨也こそ 楽にかんこ草 こと
古説連錢草 こと 俗二称 こと 蔓生して地 こかんこ草 ハ 痔疾の こと
こと 名 あり 小児 食初の 菓物 ハ 此 を 画く 今の 唐草 の 初 と 云 未詳
又一種 獲 こと ある 鹿蹄草 初名 ハ 鹿蹄草 こと 又。積雪草 又げんの
こと 云 武州本所三圍稲荷社の側に多くこと

烏鳳花

蔓箕紫

ちく ○常陸にて。えんがたざこと つふ
ちだんこと ○田州にて。ちやうてまること つふ 花のこと みぐるまて 四出一房
に数百花 ほく 玉茎 称 て 茎 ハ 有 こと ものれぐし

鹿蹄草

ちくらん○大和にて。まさきまたはこぶかつらとも
鹿蹄草未詳 江戸にては四谷大宮八幡社地にてふう回ふ稚ほう
つるみんぢん○江戸にて。つくばまつばらとも本草山中にて。ちろぶと呼
いちやくさ○江戸にて。こもちさうとも

羊乳

つりかねめくさ○西国にて。めとうぐさとも ひさをこてとも
山薄荷なり

滿羊藿

いかりぐさ和名かなみぢん○山城山科にて。びちやくとも越中にて。

薄荷

沙参

ちやぐちやとも信濃にて。きつねどきとも紀州にて。ちてんぐとも
南部にて。ゆまだいこんとも上総にて。角びちやとも

大戟

のうるし○山城伏見にて。さつまのちやとも江戸にて。たうくだいとも

澤瀉

うだいぐさ一名ちやぐさ○備前にて。みこのまくらとも

鴨跖艸

あをるつきとも つゆくさ○米国にて。あをだれとつゆくさとも江戸にて
○つゆくさとも上総にて。ちくしぐさとも尾張にて。ちくしぐさとも

かぶにて。こうやめんとふ近江にて。こんやたらとも摂津にて。かまづら
とも土佐にて。うまのつらとも

菱蔓根

白石翁のいはくよろびのたまの
朝日影とあり中てにとふ山ふ八月に彩とあり中てさけば月のとも
今按に 新古今集 かもづ世のあるほのうらの海ふ山ちとも長崎にて
菱根にて拾ふる所にて世をはにさんたうと称して拾ふ長崎地方にて
を拾ふるものを今のしもちぶりのめしと称長崎にて略して又俗
に蔓根とふ中の月ふ月にて制しふる物とふ

蕺菜

かはつりぐさ○近江にて。どんがぐさとも常陸にて。まとぐさとも安房
にて。まもげとも一名連銭草又積雪草を連銭草とふ八重葉銭
に似る故なり同名別物とも
だくやく ちぐさ○江戸にて。ぐくだとふ武蔵にて。ちづくとふ
上野にて。ぐくまとふ後河沼津にて。ちびとも紀州にて越前にて。

ぐくなべぐさ

升麻 とりあし 俗はとり ○京にて○あわぼと云 下野陸奥にて○わくびと云
同国にて茎をくさぢや 又うぢちやと云

遠志 るんじ○京にて○ひめはぎと云 西国にて○節栄と云

天麻 ぬすびとのあし○信濃にて○ぬすびとのあし 和名 下野にて○のづちと云

龍牙 だいこんそう○江戸にて○たんごぐさと云 備前にて○だいこんさうと云 是を黄ぶ
菘に似て実はやさともぢぶ梅と一種根牙草も大根草と云未詳

兎葵 いはぶき○越中にて○えこべらと云 加賀にて○えこべらそ 是ハ正月七日
七種のうちのはこべらにはあらず

景天 いきくさ ちまんぐさ○京にて○ちんぐはさうと云 筑紫にて○ちとめぐさ
いふ所にて○いちやくさうと云 今按に景天を和名いきくさ 葉白く
花一茎に集り咲て白く口紅にてうるはしき小花のごとく茎を持て

気をうけて物に応じかたくして後雷の所有物を摘ことなり
故につきぬくさといふ事にて弁慶草と名付る欤 又一種鋸草なる物あり 花ハ
きりんさう 又東国にて冬の日老人巨燵をふさがぬるをこころみに
といふ其名ハ巨燵のうちにて死といふ事なし 弁慶草を又ハ泣
弁慶なとといふハ人の肩にかきつぎて泣勝とい 又東国にて
巻葉を尺余りに制て縄をかけて中にさげて参る魚の実を貫き
品物に名づけて弁慶とよぶ是ハ彼の弁慶が七つ道具といふ物に
似たるとて名づくる欤

独頭蘭 ほくり○勢州にて○ほくろと云 播磨にて○ほくろと云 四国にて○ちくり
東国にて○えくりと云 又○ほつくりと云○ほくりハ略葉に似て花もしべき花を
奴僕を根をとりて皸をつくろふの実用にてそくふと云ハ東国にてこそ
くさと云 何なりともくふとハそくひ糊抜などいふなるべし

菩

あさぐ 一名すりあのぐさ ○近江の大津にて○ちやんきんと云尾張にて○とちのかぐことゝ 同国にて泥亀と甲斐にて○ちちぶけ伊勢にて○どんぐあぐさ同国白子にて○いけのおもぐさ 後河にて○なぎかぐ 同にて○いもかぐ 同にて○えんがいもだとゝ 尾張にて○かいも 備前にて○ちゝぐんぐさ 江戸の里言にて○かへるぐんざ 又○かつぺのたま 上野にて○ちきのつひ 常陸にて○どぶどす 信濃にて○ぶなぎ 越後及越中加賀にて○びあそ 泥亀を

今按に菩は蓴菜の類夏生にて茨城の沼ひろく一種白花なるものを睡蓮と云京都にひつぐさと云元来赤花なり未開ようにぐむ中に多し又浮草は摠名にて萍とゝひ蘋と云種類ちがひ菜の裏に水沫ありこれを蘋水沫なりは菩なり又田字艸と云ものは則蘋なり蓴菜

詩周南 参差荇菜又あさぐと訓ず

浮醬 夫木 おもゝとうこ源ぐね浮醬ようあさぐのさてうはなる なぎ○茨城にて○さてぎやう又○水あひとゝ東にて○水あふひと云 澤桔梗の名 中国及九州にて○あぎなすとゝ

西施龍 水葱と書く花を沢ぎやうと云 又杜ひろくさ 桔梗の名

たぐ〳〵○京江戸にて○たぐりと云 又○たぐりと云 又○たぐりと云 又○ひきのかさと云 又○かへるのきつけと云 又○たらびとゝ 仙たぐりと称する物 ニ称する

眼子菜 ひるむしろ○茨城及水戸にて○ひるむしろと云 関東にて○ひるもとゝ 信濃及越中にて○びりこと云 奥の津軽にて○びりと云 又田夫と云 又蝦の睡と云

荒 救荒本艸 よさゝ○ひこと云 実に笹の葉に似たり

こも 汎名にこもと云 又ひこと云 又こもをまくにこもと云 又こもをまくにこもと云

古今 みちのくにあさうの沼のたれつとかつゝくまはたれこそ

燕子花

かきつばた○常陸にて○かほどれと云（これハかほよどれの略語なし）
かきつばたをも坂東にて筆花といふをきゝて
「ふでてふ花とハ人をきくからに一首ハかけてきつけさむ　信海

牛面

たそば○加賀にて○かへるそばといふ奥州にて○牛のひたいと云

綿棗児

つるぼ○山城にて○つがといふ筑紫にて○ずいせんといふ又○なんばんすみれと云安芸にて○うしのふし又牛ひらうりと云田野に多く春宿根より生ず夏にいたりて薄紫の穂のごとくなる花さく菊ぐさの花に似たるを宮人寸根ハ水仙の如し

蘿摩

ちゝくさ○京にて○ちゝぐさ又○らまさう江戸にて○ちくさ又○らまさう
ゆきのした上総にて○やいとばな（花実に似たり）ばなと云○かゞなと云土佐にて○かゞいも
とも云　蘿摩(らま)ハ腎(じん)を益し精(せい)を補(おぎな)ふとの其葉の形細長く両対(いたい)して
ありてにうす白く菊毛好事(かうず)の人ハ其のかゞみとなし又ち根を灸(けがり)て
今ハ人にて苗し紫茎(くき)ともに白毛あつて摘(つむ)時悪臭(あくしう)有消(け)実(み)ハ細長く云

実ながりて其色ちまきに似たるを名づけて雀瓢といふ秋の末熟し枯て二つにわれ中より絮のごとくなるものを出す是を東武薬店にて和のだんやと云

羊蹄

し　俗にしのね○近江及西国にて○ぎしぎしと云出羽にて○志んざいと云江戸にて○大黄と云　松岡氏曰薬家(くすりや)窄眼(つゝめき)と称する物真の大黄にて汗(ぶぎ)と称するハ土の大黄の類刈羊蹄なりとぞ

蘭菊

らんぎく○京にて○らんぎくと云西国にて○山かうぢなとゝ云是ハ香蒲の類にあらず漢名未詳

聚八仙

かいだ○筑紫にて○やぶでまりと云

車前

おほばこ○甲斐にて○こちびきと云房総にて○どうづきなどと云越後及奥州にて○かへるばと云

海金砂

うたくさ○京にて○かにくさ又かんつる草と云近江及美濃或ハ上野にて○たゝきぐさ又いとかづらと云西国にて○ぞうかづら又さみせんかづらと云

堇

きさうれん○武州及近江加賀能登又東海道の邊にも多し○ちまつふうりぐさ
とも云なり○すうれんとも云郷名○ちまつふぐれ仙草○かぎぐれとも云大
和の方良小児○治郎坊太郎坊とも云和国○よく馬とも 堇一名ま
ひきぐさとも漢名鼓力草 花紫白二色ともに莖の上に鉤の
形あり○ちまつふぐれまぐれ相ひきて小児のあそぶもの故にちまつふぐれ
名育又東武にて○ちまつふぐれとも称する列侯の江戸邸にてそだつこと
ふぐれの種なるを知らずと云漢名不知尾張にて○やつまさとふ花之負砧
足を戸にかるるとまふとうるおいたる謝句もむ〜がうとなるの

蜀羊藻

ぐんげ○武州にて○ぐんけぐさとも云なり○まんげだれとも云紙尾張にて○
蜀幢花とも云 今俗にいふ[illegible]にいふとも云なり今ぐんげぐさ
いふ紫草の名なり似て花ふさ形芝のごとし歌人今古称賞して
ちまつふぐれとも又正月七日せ粥の菜美のうち佛の座と云説非なり又

錢藤

こうぶり○大和及伯耆にて○ときわぐさとも

蕎麥

かるるも一名ちもぐさ○奥州にて○おうぐまぐさとも云是 本艸に謂蕎麥代
ものを和名抄に流ものの刈萱とあらんかはいまの摠名 日本紀に萱姫
想て苗の始て生るを尚美流る 又木艸は從ひ艸ある仏
の文字をしたがへて 桔梗 出茱萸の影まで高木の梢をお通して
なり 丹鉛録に青史古礼云 男子生而射天地四方其文云東方之弧
以梧 梧者東方之艸春木也南方之弧以柳 柳者南方之艸夏
木也中央之弧以桑 桑者中央之木也西方之弧以棘 棘者西方之
之草也秋木也北方之弧以棗 棗者北方之艸冬木也是又可稱
草也云云

天南星

をかうひ○系統記名ともに○むさしあぶとと云

豪吾 つハ○江戸にて。つハぶきと云 たゝらこと云

続断 をゝつゞな○江戸にて。をゝうこと 信濃にて。へゞらこと云 本艸會志

続断をゝうこと又ゝもうこと

巻柏 いとひゞ○伊勢にて。いとまつと云 武州秩父にて。てんぐのこしかけと云

和名にいとゞこしかけと云ハ今云いとひゞ

有通 ゆうゞ〜 一名ゆうとまゝび ○駿河にて。ゆうとまゝびと云 九月実なりて翌年まで枯ずあゝゞ〜とつゞ

紫羅傘 いちゝ川○伊豆 駿河にて。ひでり草又万年草とつゞ

水仙 ゝとせん○房州にて。きんぐいと云 一名ゆる地を金盞銀臺とのハ

千葉にゆるを玉瓏玲と云

蘡薁 いぬゝび○京にて。いぬゝびゝ 武州にて。むまのぶゝ相

模にて。ゝびゝろ上野にて。山ゝびと云 ゝびと云がまごゝろ又ゝびゝろ

ゝびゝろ云 野葡萄也

西番蓮 こけいさう○長崎にて。ぐろんぐらとつゞ 時計草八享保年中始て

ゝる西番蓮とかゞけて来る〜 笠翁画傳 二出

蕙茲 ずゞだま○東國にて。ずゞこと云上総にて。えちこくとつゞ

日向葵 ひうゞあゝひ 丈菊○江戸にて。ひまわりと云大和にて。ひゞるまと云

紫金牛 かゝたちぐさ○京にて。かゝたちぐれと云 奥東国にて。やぶかゞと云

鳳尾生 くこうゞ○うつぎ○武州にて。をらんざさと云 かゞにて。ゝろたゞと云

甲州にて。よあぶゝ〜と云

海仙花 さつきぐさ○仙臺にて。けゝのさとつゞ 常陸にて。ゝうつぎと云 紀州にて

○やまぶすこと云 後にて。あゝてゝ〜じとつゞ 駿州にて。たいゝのさと云

南天燭 ゝゝのきと八民俗海參の掛にまるゝ所に為くとつゞ

なんてん○上総にて。らんてんとつゞ 南海別志 三 八種画譜 紫天竹と云

かゝたをやまゝもらとゝ八甲斐にて。ふかるべ〜とつゞ

玉紫 茶蘼

たまむらさき○京にて。むらさきたちさきとゝふ筋ぶにて。こむらさきと云
ときゝんいぐら○武州にて。ごゝやをぎと云江戸にて。ときんぐらゝ。びゝ
んぐれとゝふあるにて。きゝいぐらと云
葉に花ハ白牡丹に似て小なる物なり加にがんぐれとゝふ秋又こびろく
とゝ多酒ハひ花の実に似ゝうにて或ハ醂醸或ハ除鹽絲等の説あり
松岡氏とぶろくハ濁醪の物語とゝふ　文選に濁醪ふごろうさけと
訓ぜ実西にてハどびろくと云実東にてハどぶろくともふごろうさけと
いふ松屋氏の説によるべきか

郁子

むべ○奥及南部にて。木あんぢゝと云　或説に是ハ本草に載る木
蓮の実也然るに和にて熟〻味ひ甚〻小見妙なり食ふ江州高嶋郡
奥島灌兵衛とゝふ人の毎年十月朔日　禁中に献ず　文武天皇の
ころゝ今に絶ずとゝふ人ゝ説ふと稱ふ愛〻て瘡腫を治ふ能

天仙花

崩ゆぶ〻て平癒をとゝふ多くたゝ
さるのちゝ○野州にて。かさのちづさと云後ろ
説にハ樹花おゝて実を拾ふうどんげとゝるも天仙花をさゝ
ゝ　を梅ようどんげと称する婦ふたさく歩戎をべて平癒あゝん
無花果　本州称名　ようとんげと有又芭蕉の花をもゝふ又天仙花未詳

合子草

ゝめのごき○京にて。ひめうとと云和ふにて。よめごきと云東国にて
○ちゝめのうとゝふ安房にて。きんぐんゝさゝゝ

堅香子

かゝうご　ゝゝうご古名今ゝゝうと云○奥及南部にて。かゝうとと云武蔵にて。かゝゝゝ又
うゝ西にて又ぐんぐいゝと云京にて。ゝゝう西にて野及日えんゝにて。ぐん
へいとゝふ　松井氏曰奥及南部にかゝうとゝ云るゝゝ形百合に似ゝう
花も四月頃ゝゝの花さくゝ猛をゝうて葛のゝくゝ花し
て稱と称ゝて食ふ　萬葉及新撰六帖ゝ浦どゝ示の堅香ふと

いろ物なりとぞ
万葉 〜そのゝ女のやそのいとそらうくこそまふち井のゝかさこの花
六帖 〜そのふのやそををあゝらあまそひ奈井のゝかのゝかゝの花

辛夷 笑靨花 一名木蓮又迎春花とゝふ

こぶゝ○奥州部まて。ひさゝらうとゝふ
こゝめさゝら○江戸まて。こゝめゝさゝらとゝ加賀まて。こゝあやゝさ武州及
江園まて。こゝめゝだれ又もゝゝけ又也さやゝ紀州云

夷曲集 〜それゝゝねこれハ木の根まこれ今ハ粉末の花の風ゝとけて

雪越花 八手木 莽艸

こてまう○奥州津軽まて。ちゝゝけゝとゝ
やつでのき○上総まて。うゝはゝぎゝとゝ八ゝ木ハ和名
ちきゝ○武州まて。かゝゝちゝのさゝとゝ国語まて。ゝれの木とゝ
江戸まてちきゝこの名ハ勿論ゝゝ花とゝゝ名ハ略
なゝゝゝ貝原翁のいゝく櫨ゝハちきゝ名ゝゝ成人ちきゝの実

毒ゝあゝゝゝとの巳余考るに毒ゝ湯て今日ゝ蘭ゝゝ又六月廿四日
京師の男女憂宕に詣て櫨を求めて下向する事あり ちきゝ系
名所あり 名根好恩の所に

〜あゝゝ山ちきゝゝゝ系に書つゝゝゝ人の詠にもあり〜

木槿

むくゝげ○東国まて。ちゝゝとゝ京江戸ゝゝ。むくゝけとゝ常陸及上
総下総まて。さゝちゝ。ちゝきゝの下野ゝ九州まて。ゝゝゝゝ今日を云
奥州まて。かきつゝ花ゝきゝちゝとゝ南部まて八。ちゝちゝすゝとゝ云 一名和名抄

萬葉 ゝ〜あゝゝゝ八胡麻ゝゝふてさゝゝとゝ口ゝゝけゝこゝ咲ゝゝゝ

ゝ郷ゝ胡麻花なゝゝん

曼陀羅花

今物名 ゝふゝゝゝゝ郷ゝ八今ゝゝあゝゝゝ和名鈔ゝ雪華花あゝゝ名ゝ別ゝ

古

まんだゝけ○江戸まて。ゝゝせんあゝゝゝとゝ稗花まて。本あゝゝ稗ゝ云
遠江まて。ゝゝせんだゝことゝふ

五味

さゝぐら○大坂にて。びぢんさうといふ東にて。びなんぐづゝと云出雲にて。こゝろかづゝと云伊勢白子にて。ふのりぐらといふ又さゝぐらの字は茅萱の字味なる相模底倉辺にて。五九の伊と云

藤葵

さるとうばらさるとのゝ○近江及後藤にて。からゝちと云伊勢にて。かんたらと云備後にて。わらんひと云佐渡にて。あいぐらと云筑紫にて。かめいぐらといふ豫にて。かごだらといふ筑後にて。さるかさだらといふ

山茶科

俗に侵山椿葉とする物也なり和名抄に椿葉とあり椿葉を以て小麦餅を包むと云餅を椿餅といふ也あり

〔あるひに猪さゝやあるひは鹿尾菜にて。ひやうぶといふ

支考

きうぶ　くゝつまり　くるたに古方なり○茶用及茶磨尾張にて。ひやうぶといふ

茶用及茶磨尾張にて。ぶやう姫といふ搗磨ふて。まうがといふ

今按に

枚葉本艸

山茶科和名リヤウブとある是也山民茶を採て

蒸て食のたもけとする物

夫木

〔男人やれ男ふつもどんをうつもりうまを人うハまをり紀まろう

まされ○武乃ゆて。まされといひ又むつぢきと云上野にて。ちさいれと云

和名抄に。ろろだと云　薪のろろき　夫木に

柾

柾にて。ゆ〜白玉椿にて別待〜

〔君が代ハ白玉椿やちよまでも伊よかてんきりかなれた

こゝろあり是なり

後拾遺

式部大輔資業の母に

合歓

稱ぶのき○京にて。稱づのきゆ及ゆゆにて。ねぶのきゆゆて

○かうらんぼく近江及越後にて。かうらのきゆゆにて。稱づのきゆゆにて。稱づのゆと云

周防にて。ひぐらし義仙にて。かうらのひと云

萬葉

稱ぶ又かと云稱り

吉利子樹

うぐひすのき○江戸にて。うぐひすと云樹にて。こゝにて。うぐひすと云樹にて。ちぐさとゝ

本八二三頁に及ぶ小本

まて宵小花しらく三月実熟すと赤くして中くぼ形白仙人掌
小豆如て食ふ事おい法こしのやく秋まて花ありて紅色なり三月の比まに つか
ふ也 救荒本草 三名急縻子和名ウグヒスノコ

蚊子木

ひうん○和名さるびやう云去仙人掌とい尾形也
○きひうんと云 今秋に花の開て白色也ゆしの赤と云又俗西
土の本草に云ふ赤花生ふる出の巣ゝ中より知る也尾州は
ていんのことふ也 ひうんと云時ハ瓢の字にて ひさご也又後漢書
八紘の篇にて吹毛洗毛又胡椒壺ゝ或ハ瓢簞に かゝる也
ひうんとうぶとる

橡實

どんぐり○信濃にて ぢどんぐりと云又どんぐりの蕚と云ふ也 よめの
ごさとゝ伊勢にて こめのごさとゝ云越後にて なりぶかと云上野にて
○よめのごとし云 今秋にてゝうと云ぶとゝ云ハ古名なり今

○くぬさ又○こなら又○いしなら などゝ云ハ同じ ハ○なりぶこうとゝ云 ふ
ふそ○ふるゝと云越後にて ぶどんぐりハ別 くぬぎの ふるのこと
池田炭ハ此をとりてやく 桜炭一名ともゝ云 ハにてやくとゝ云ハ池田
炭と称す

小梅

こしめ○梅也 ○むめと云字和及近江にて ○庭むめと云 これ梅の小枝なり
ちさくてい○異東の称号なり和国にて ○かんうめいと云
かんうめい○異東にて称し 中和にて ハ○浅香山と云

梅 明

実紅 梅

水楊

かいやなぎ○京都にて ○ゆのぶと云 ○ゆやなぎと云
えこやなぎ○京師の称し 能登にて ○いぬやなぎと云 牙枝にてづ
又扇の柄となる也

白楊

かハと云○上野にて ○くさとゝ云 ○ゆのぶと云上野にて ○ゆのぶの本と云 称して
○こぶの本と云

接骨木

楠木

めるでのさ○尾張及上野にて。のでの木と云上野及信濃にて。とう
かでのさと云陸奥及越前相模にて。かつて木と云 是ハ勝軍木と云ふなるの名なるべしなと云ふ
奥津物にて。ごてまぎと云 天台真言宗等の僧徒護摩を修行もするに山中と用ゆる故に名つく
たつのさ 和名たつのさ○山城にて。たつの木と云ふ長つにて。こぶしのさと云ふ
にて。つでの木と云伊豫にて。さくわがと云上野にて。あぶらぬとびとのきと云ふ
又。あさだの木とも云上野にて。ちわだ木と云ふ伊豫にて。くろだ木と云
業に本草の略に肉桂と仰せられたる肉桂ハ此樹の皮にて山中の人ハ
なり一名にやぶ肉桂ともえ

山椒

さんせう○蔓もなく味も辛くなれ物と用ゆるにて。ひんやうと云

枸橘

からたち○和名にて。げとと云

樟

ゆづさ○山城にて。あらめがしと云 樟の名にて。ごさいと云ふ
ごさいとハ朝廷の御祭禮の用ゆる和名抄に中臣の八この木ハ

檀

書を刻む又弓をはるに用ゆる故に樟弓と名つ一名木王
もとのき○東にて。たんのきと云奥南部にて。やぢとと云ふ○たん
の木の実を尾張にて。山ぐんごと云 俗名ちうとう
ひらぎ○上総にて。ゆづさと云

枸骨

くろもち○越前にて。ゆづさと云信濃にて。ぢちやと云ふ

鈎樟

今按ふ鈎樟花ハ黄色ありて。実ハ黑し一名乳香花ハ住吉にて俗に
蔓る故に信濃にて童謡よつぐやぢちやどの咲で蔓るとうつるぞと云ハ
可愛やとうふ事なり 再業に越前国にてくろもちの事を称して名
つくる沢非也称うと八一本をきりて用ゆるハあぶくろもちの條にて又
外の木のもとハ人にて。とうたと人ハ橈の柄。或ハ彩炭俵或ハ竹をおど
ぶも縄のやく用ゆる物を也称ることハ称うもの略語と歌も
一秋の節に萩ふれたのこるハとおろ称ゆ称うものくさけてうおり

李　柚　笋　紫

とよめり　ある人ハすもゝとハ桃なしといへる名也　近江人ハすゞの浦にたちばな
これハからもゝとなづくと称せしも活なきこと也　畿内にて男浪にハおほばた
すもゝ◯奥州にて。すむめといふ
ゆ◯京都にて。ゆと云　東国にて。ゆずと云　中国にて。香橙(かうとう)といふ
たけのこ◯上総及房州にて。たんこと云
たかんな◯京都及中国ハ陸奥辺にて。たけのこといふ　筍ハ　東国にて。うどうといふ
といふ　美濃尾張にてハかたちに　かうりてそらといふ　加賀にて。ふし忍と云　越前にて。かせと云〇上野にて
〇むやといふ　丹波但馬辺にて〇たどろと云　紀州にて〇のどろと云　荊棘(とげ)の　伊勢にて
にてハ茨の付るを紫といふを誤ルを〇こがらけと云◯又木の小枝なる物を
京都にて〇かせされと云　伊勢にて〇つまぎと云　坂東にて〇かなぎと云　中
臣祓ニ　天津(あまつ)金木(かなき)　文選　以莛(もつて)撞(つく)鐘(かねを)　註ニ　小木枝也　云◯紫肉にて〇ころき
と云を東国にて。まきといふ　能登及加賀陸奥にて〇だいぎと云　又なづし本

榾　菌蕈

といふ越中にて〇又ちま五郎といふ
かさ◯関西にて〇かさと云　尾張及出雲辺にて〇さうふと云　伊勢にて〇
根ぐしと云　安房にて〇猫つらと云　上野にて〇ほど(?)といふ　信濃にて〇かくい
といふ　ぶぐわ又ハかれぐわの略り　武蔵にて〇猫つらと云　按に猫つらとハ根株也　根(ね)がつて
あくぼる歟　一川中の根本によるぶなるとおもへし　根株も伐株(きりかぶ)
の義なるや又ようころふハ橿轉(ようころぶ)なるべし
たけきのこ◯中国及九州にて〇なばといふ　北国又ハ美濃尾張にて〇こけ
と云　奥州南部にて〇きのこと云　佐渡にて〇みゝと云◯初茸を美濃之
河尾張にて〇あをたちと云　仙台にて〇松みゝと云　奥州南部及近江にて
〇あいぼうと云　因幡にて〇あいたけと云　肥前九州とも〇松なばといふ◯
紅茸(べにたけ)を九州にて〇ちちうすと云◯檜茸(ひのき)を相州塔の沢にて〇宝源(ほうけん)
坊と云◯鼠茸を江戸にて〇ねずみたけと云　筑紫にて〇水てきといふ

松毬

まつかさ　まつぼくり　○炎門を過て。ちくアといふ

〔生の物ぐ〕に似たる義のまつの木を咲て侍るめり　貞德

物類稱呼奏之三終